

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構国文学研究資料館

国文研ニュース

No.32
SUMMER 2013



〔嵯峨本三十六歌仙〕(当館蔵)

目次

●メッセージ

資料館の展示と解説：雑感 井口 和起 1

●研究ノート

シーボルトプロジェクト海外調査経過概要報告 牧野 悟資 2

故増田太次郎氏収集による広告コレクションの紹介と位置付け 山田 哲好 4

基幹研究「民間アーカイブズの保存活用システム構築に関する基礎研究」 大友 一雄 6

特定研究「日本古典籍の書型に関する研究」 陳 捷 7

●トピックス

「近世語彙カードデータベース」について 武井 協三 8

企画展示 渋沢敬三からのメッセージ

— 渋沢栄一「青淵翁記念室」の復元×渋沢敬三の夢みた世界 — 青木 睦 9

連続講座「くずし字で読む『源氏物語』」 10

平成25年度 国文学研究資料館「古典の日」講演会 11

『HUMAN——知の森へのいざない』第4号 11

第37回国際日本文学研究集会 12

総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況 13

資料館の展示と解説：雑感

井口 和起（国文学研究資料館運営会議委員・京都府立総合資料館顧問）

京都府立総合資料館（以下、資料館とのみ表記）に嘱託管理職として関わり始めて8年目を迎えた。昨年度から運営会議委員として参加し始めた国文学研究資料館にも何かのお役に立てばとの思いから、私の職場での小さな経験を率直に書かせていただくことにした。

私は館長職に就いた直後の新年の挨拶で、職員のみなさんに中学生用の国語辞典を手元に置いておくことを提案した。私が用意してお配りするから同感する人は申し出て欲しいと言ったのだが、申し出はゼロだった。

資料館には利用者として長年出入りし、時には企画展示を参観していた。その時から感じていたことを、たまたま企画運営の内部側に立ったのを機会に提案したのだが、すこぶる評判が悪かった。というよりは完全に無視された。

展示物に関する解説文をもっと易しい文章にしよう。中学生用国語辞典に出てこないような語彙は出来るだけ使わないで解説を書こう。そのために手元に国語辞典を置いておこうではないかと提案したのだが、賛同は得られなかった。解説文は相変わらず難しい。専門用語が多すぎる。史料に出てくる語彙をそのまま使い過ぎている。

例えば、14世紀の荘園の用水の絵図を展示している。隣接する別の領主の荘園との用水をめぐる争いの際に作られたものである。「○○国○○荘用水差図案」と原資料名を表示するのはよい。しかし、その解説文の中で、「相論」、「差図」、「去り渡す」などの用語を使うのは如何なものか。「相論」は「争い」、「差図」は「絵図」ではいけないのか。「去り渡す」などと言わず「譲り渡す」でよいのではないのか。近代資料でも史料に「京師」と出てくるとそのまま解説文に書く。なぜ京都と書かないのか…等々。

正確さ・厳密さを維持し、字数を節約するため、結局、史料のままの用語を使う。あるいは一般的な現代語に直したのでは厳密さに欠け、微妙なニュアンスも伝わらないというのだろうか。しかし、一般の参観者が容易に理解できないなら、解説文は役に立たない。参観者をどういう人々と想定しているのか。ほとんど専門家を思い浮かべているのではないのか。正確・厳密でないという専門家から批判を受け、無知を指摘されるとでも心配なのかなどと、ついつい邪推もしたくなる。私は専門家でない一般参観者に大意を伝えてこそ解説の意味があると思うのだが、そうは理解していただけなかった。

そのうえ、文字がきわめて小さい。そして全体に暗すぎる。

展示物よりも目立つ大きな解説パネルではいかにもバランスが悪い。しかし、余程近づかないと読めないような解説パネルでは役に立たない。

明るさについても再考してはどうか。貴重な文化財の展示には保存上からも照度制限があることは充分理解しているつもりである。展示物の形状や素材、経過年数など資料自体のもつ性質、費用に制約されながらの照明機器の選択、加えて展示室自体の天井の高さや広さ・構造、壁面の素材等々から、照明に苦労があることもわかる。しかし、展示室全体の明るさと展示物に向けられた照明機器の光の種類・照度を考えて、展示室全体をどこまで暗くしなければならぬか。余りに全体が暗すぎる展示施設や博物館にでくわすと驚く。奈良国立博物館での正倉院展などでは文書の展示もあったが、展示室全体は結構明るかった記憶がある。それに比べて資料館は狭くて暗い。息が詰まりそうだ。

解説文にも照明にももう一工夫して欲しいというと、展示は私たちの本来業務ではないとの返事が返ってくる。創立当時の資料館は図書館機能、文書館機能、博物館機能の3機能をもつ総合的施設で、Kyoto Prefectural Museum and Libraryであった。しかし、1988年3月に美術工芸・民俗資料などの収集・保存・展示の業務を、新設の京都府京都文化博物館を運営する財団法人京都文化財団に委託して以降、館はKyoto Prefectural Library and Archivesとなった。だから展示は「本来業務」ではないという。また、施設そのものの貧弱さも大いに関係している。だが、それだけでないように私には思える。どこか既成観念や悪しき伝統にとらわれているのではないのか。

資料館は今年創設50周年を迎え、老朽化した館にかわる新資料館建設が隣接地でまもなく着工される。この時期に思いもかけず日本ユネスコ国内委員会の記憶遺産選考委員会が館蔵の「東寺百合文書」をユネスコ記憶遺産登録に推薦すると発表した。随分とありがたいことなのだが、正直に言って戸惑いもある。日本の一般市民にもなかなか理解できないような解説を書き慣れてきた。この資料群が人類「共有の記憶」として価値を持っていることを外国人にも解るように説明できる解説を作れるのかと不安を持つ昨今である。

シーボルトプロジェクト海外調査経過概要報告 －国際共同研究「オランダ国ライデン伝来のブロンホフ、 フィッセル、シーボルト蒐集日本書籍の調査研究」－

牧野 悟資（国文学研究資料館プロジェクト研究員）

本プロジェクトは、人間文化研究機構の「人間文化にかかわる総合的研究推進」の一環である「日本関連在外資料の調査研究」の研究課題「シーボルト父子関係資料をはじめとする前近代（19世紀）に日本で収集された資料についての基本的調査研究」の一つのカテゴリーとして平成22年度から開始され、国文学研究資料館を中心に国内外の研究者と調査・研究を進めてきた。主な目的は、フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトが、出島のオランダ商館医として来日した1823年（文政6年）8月からシーボルト事件によって国外追放を言い渡されて離日した1829年（文政12年）12月までに日本国内で蒐集し、オランダに持ち帰った日本書籍（豊物や一枚刷り等も含む）の追跡調査、それによって得られたデータの蓄積、さらには目録を作成することによって、その総体を明らかにすることである。そして、そこから浮き彫りにされる、各資料の伝来経緯を始めとする個々の問題の解明を試みることである。本プロジェクトで軸となっているのが、1年度につき2度の海外調査と研究会である。本報告では、前年度までの海外調査及びこれまでに判明したシーボルトのコレクションの概要について述べていきたい。

まず、最初に注意しておく必要があるのは、シーボルトは、1859年（安政6年）8月から1862年（文久2年）4月にも日本に滞在し、かつ大量の日本書籍を持ち帰っていることである。本プロジェクトが対象とするのは、先に述べた通り、最初の滞在（第一次日本滞在）で持ち帰ったものに限定する。理由としては、文政期の、しかも約7年間という限定された期間に入手した日本書籍が、ほぼそのまま残って

いるということは極めて稀なケースであり、こちらの調査・研究が優先されてしかるべきと考えるからである。

シーボルトが第一次日本滞在中で持ち帰った日本書籍（以下、シーボルト・コレクションと略す）は、オランダのライデン市にあるライデン国立民族学博物館とライデン大学図書館にその大半が存在する。なぜなら、1830年にオランダに着いたシーボルトは、翌年には日本書籍を含む日本コレクション全てを国王に売却、そして1838年に正式に売却し（但し、管理はしばらくシーボルト自身が行った）、その間さらにはその後には、所蔵・展示施設の名称及び所在地をしばしば変えつつ、最終的に現在のライデン国立民族学博物館の所蔵となったからである。よって我々は平成22年度にまずライデン国立民族学博物館から調査（悉皆調査）を実施した（但し、実質的には前年度より開始していた）。ライデン国立民族学博物館所蔵日本書籍からシーボルト・コレクションを見分ける方法は、いくつかある。そのうち最も確実性が高いとされるのが、シーボルト・コレクションの円形印の有無を調べることである。この印は、遅くとも1859年までに捺されたこととされる。もう一つ別の方法を示せば、1845年に刊行されたシーボルト・コレクションの目録であるシーボルト著・ホフマン解説『フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト蒐集並ニヘーグ王立博物館所蔵日本書籍及手稿目録』（以下、シーボルト目録と略す）への記載の有無を調べることである。シーボルト・コレクションには、そこに収められている石版目録を切り抜いて表紙に貼ったものも存在する。但し、実際のシーボルト・コレクションには、この目録から

漏れているものも存在する。

ところで、シーボルト・コレクションの中には、オランダ商館長ヤン・コック・ブロンホフや商館員ヨハン・フレデリック・ファン・オーフェルメール・フィッセルの旧蔵であることを示す印が一緒に捺されているものも存在する。これは、ハーグの王立骨董陳列室に収められていた二人のコレクションをシーボルトが自分のコレクションに移管したためである。つまり、シーボルト・コレクションには、二人のコレクションも混入しているということになるが、シーボルト・コレクションと同時期にオランダに渡った資料であり、かつシーボルト目録にも二人の旧蔵であったことが分かるように記載されているので、今回はこれらも調査対象とした。研究題目に二人の名があるのは、そのためである。

1896年刊行の *Bibliothèque Japonaise*（通称セルリエ目録）によると、ライデン国立民族学博物館所蔵日本書籍は、セルリエ（Lindor Serrurier）の手によって、1881年に同じライデン市内にあるライデン大学図書館と分割所蔵されることになった。シーボルト・コレクションも、この時に分割された。平成22年度の2度目の調査から平成24年度の調査では、主としてライデン大学図書館が所蔵するシーボルト・コレクションの調査を実施した。なお、量的問題もあり、『オランダ国内所蔵明治以前日本関係コレクション目録』（通称ケルレン目録）から対象となる1830年以前に刊行・成立した日本書籍を抽出して調査を実施した。シーボルト・コレクションの判定方法は、ライデン国立民族学博物館の時と同じである。

オランダでの調査の結果として、ラ

ライデン大学図書館のシーボルト・コレクションは、ライデン国立民族学博物館の約3倍あることが分かった。また、シーボルト目録には、シーボルト・コレクションとして603タイトル立項されているのであるが、照合の結果、そのほとんどが両館に現存していることも分かった。一方、シーボルト目録には見えて、両館所蔵の日本書籍には、現在確認できないものも1割弱程度存在する。それらの多くは、両館からシーボルトハウスに出張展示中であるか、或いはライデン国立民族学博物館に浮世絵として所蔵されている。しかし、なおも所在を掴めないものが若干存在する。こういったものの情報をどこまで追跡できるかは、残された期間は少ないが、今後の課題である。

シーボルト・コレクションは、今日ライデン以外にも存在している。既にシーボルト目録などにも明記されていることであるが、管理者であったシーボルト自身の手により、1835年にウィーンの王立図書館（現オーストリア国立図書館）へ、そして1843年にパリの王立図書館（現フランス国立図書館東洋写本室）へコレクションの

一部が譲渡、実質的には売却されている。さらに、シーボルトが亡くなった翌1868年には、息子のアレクサンダーが第二次滞日時に蒐集した日本書籍と共に、何故か手元に残っていたシーボルト・コレクションを英国博物館（後、英国図書館に移管）に売却している。平成24年度の2度目の調査からは、このようなライデン以外に伝来したシーボルト・コレクションの調査に軸を移している。既にフランス国立図書館東洋写本室所蔵の34点については調査を終えたが、半数はライデンのシーボルト・コレクションに同一タイトルを確認できないものであった。概ね節用集や往来物の類であるが、ライデンにある絵本類の続編にあたるものもあった。また端本のもが数点存在するが、概ねライデンに完本が存在している。但し、特殊なケースとして、合巻『契情草履打』は分割され、上がフランス国立図書館、中・下がライデン大学図書館の所蔵となっている。

本年度の海外調査は1度だけで、英国図書館とオーストリア国立図書館に行く予定である。オーストリア国立図書館のシーボルト・コレクションにつ

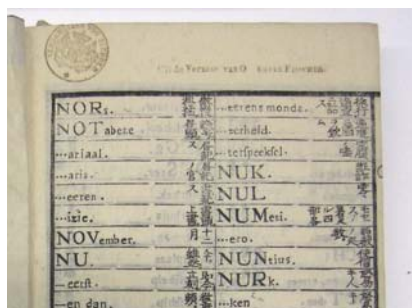
いては、同館のデータ・ベースから現在36点その可能性があるものを確認している。英国図書館についても、関連する目録類等から対象を絞りつつある。本プロジェクトにおける海外調査は、今回の調査でほぼ完結することになるが、また、新たな発見があることを期待したいところである。

最後に本プロジェクトは各国の所蔵機関の好意的な協力のもとに成り立ってきた。末筆ながら謝意を申し上げたい。また、本報告は、私個人ではなく、我々のプロジェクトチームの成果の報告であることを付け加えておく。とくにオランダで毎回のようにお世話になったマティ・フォラー氏、イヴォ・スミッツ氏、コース・クイッパー氏、ダーン・コック氏、それと一緒に調査へ参加し、苦楽を共にいたしました下記のメンバーには厚く御礼申し上げます。

鈴木淳（代表者）、青山英正、浅野秀剛、石川了、金田房子、川平敏文、神作研一、神林尚子、鈴木俊幸、陳捷、クリストフ・マルケ（敬称略）。



『続百鬼』に切り貼りされたシーボルト目録所収石版目録



『訳鍵』に捺されたシーボルト・コレクション円形印とフィッセル文字印



ライデン大学図書館調査風景

故増田太次郎氏収集による広告コレクションの紹介と位置付け

山田 哲好 (国文学研究資料館准教授)

戦後に雑誌「宣伝」を主宰し、宣伝広告のコンサルタントをしながら1965年頃から広告史研究に没頭したのが故増田太次郎氏(1905-1990年)である。1975年から(株)オリコミサービス顧問(-90)を勤めた関係で、氏が収集した広告コレクションが同社に寄贈されていたが、2009年1月に当館に寄託された。総点数約16,500点の内、主要部分を占める約8,400点の詳細目録と画像データの準備を済ませたので第1次分として、本年4月から「増田太次郎氏広告コレクションデータベース」として公開した。本稿ではその概要と整理方針やコレクションの位置付けについて報告する。

【コレクションの概要と整理方針】

わが国の広告は、①視覚広告と②音声広告とに大別でき、①視覚広告は、固定媒体(暖簾、看板、高札など土地や建物の内外に直接敷設して固定)と可動媒体(引札、錦絵、書籍など頒布・配付することで人から人へ移動)に分けられる。「引札」は天和2(1682)年日本橋駿河町越後屋発行が初見とされ、庶民の購買力を意識して化政期以降に流行し、「札廻し」「書附をして引きたり」「ねだん付目録」などとも呼称され、江戸では「引札」、京坂では「ちらし」と呼んでいた。またビラは、化政期以前は「貼り札」「貼り紙」、絵入りものは「絵ビラ」とされ、配る広告の「引札」と貼る広告の「ビラ」が主要媒体であり、さらに動く広告として印袴纏や風呂敷があり、戦後流行の包装紙やバック・紙袋も「動く広告」の代表例である。明治以降は広告団扇、広告マッチ、絵はがきなどとして大量に流布されることになる。②音声広告

は売人が自分から発する音声で一定区域に広告するものである。

故増田氏が約25年間の間に収集したコレクション点数は約15,100点で、(株)オリコミサービスでも1970～1990年代までの新聞の折込み広告をダンボール箱に入れて収集・保管していた約1,400点を含め、総点数約16,500点である。上記の分類では①視覚広告の可動媒体広告のコレクションで、本年4月から主要部分として公開した第一次公開分約8,400点の概要は以下の通りである。

年代確定分(1,570点)としては、正徳4(1714)年～昭和59(1984)年で、江戸期50点、明治期900点、大正期220点、昭和期400点で、業種で最も多いのは各種小売業2,800点、娯楽業610点、飲食店380点である。関係する地域が確定分(5,800点)で多いのは、山形県320点、東京都2,500点、京都府300点、大阪府650点である。

受託後の再整理の基本方針は、当館に寄託を受けた際に約8,000点の簡易目録データ(Excelファイル)の提供をも受けたので、整理番号はこれを踏襲し、元の保管状態(クリアファイルNo.)も採録しながら詳細目録を作成することとした。保存は二つ折り中性紙に挟み込み、中性紙ボール箱(外寸:64.5×54.0×5.7cm)に収納している。詳細目録として採録した項目は以下の通りである。

(1) 資料番号、(2) 元ファイル番号、(3) 種別(両面か片面)、(4) 表題、(5) 屋号・店名・氏名、(6) 業種コード・業種、(7) 地域・地名、(8) 都道府県コード・都道府県名・市区町村コード・市区町村名、(9) 版元、(10) 画者・作

成者、(11) 記載年月日、(12) 作成年月日、(13) 西暦、(14) 大きさ、(15) 内容注記、(16) 一般注記、(17) 画像(有無)

表題は、「口上(帽子・鞆・洋服……)」「食料品・酒……」「口演(小間物・太物類・荒もの(荒物)・瀬戸物・膳椀品々・ぬり物(塗物)・昏るい(紙類)・砂糖類・かん物(乾物)・染艸(染草)類・筆墨硯・きせる(煙管)・煙草入・砥石品々・紅おしろい(白粉)・元結油・せつた(雪駄)・下駄傘・万足袋・股引脚半・手甲腹懸)」「心才橋(心斎橋)」のように、原表題を採り()に商品名を補記し、文字列での検索が可能ないように常用漢字も補記した。また文字が一切記されていないものは「| 飲食店|」と採録者が補記した情報であることを示した。

都道府県コード・都道府県名は採録したが、市区町村コード・市区町村名は、平成の大合併後であることや近世・近代の地名から現行地名の同定に時間を要するので現在は未入力である。

業種コード・業種は、総務省統計局「日本標準産業分類」に準拠し、第3レベルまでを採用した。

内容注記には、故増田氏が書き留めたメモ(年代推定や内容コメント、雑誌・新聞からの切り抜き典拠など)も重要な情報であるので採録した。

画像データについては、寄託時に(株)オリコミサービスから6,691カット分の提供を受けたので活用することとし、未撮影分は当館にて新規に撮影した。第1次公開分(約8,400点)は、(株)オリコミサービス提供分5,356カット、新規撮影3,014カットで合計8,370カット(7GB)である。

再整理の現状は、総数約 16,500 点の内、最近（1970-90 年代）の新聞折込広告約 1,400 点を入力中で、他に「増田アーカイブズ」390 点（広告展の企画書やキャプション・ネガフィルム・アルバム・展示会アンケート回答、翻刻原稿、新聞記事スクラップ、著書など）と「貼込帳」の燐票（燐寸ラベル）・千社札（計約 3,900 点）は採録済みで、デジタルカメラで撮影したデータのトリミング処理中であり、できるだけ早期に全体公開を図る予定である。

【コレクションの内容】

本コレクション内容の理解には、故増田氏の広告史研究の目的と密接不可分の関係にあるので処女作『引札 繪ビラ 錦繪廣告』の「著者の口上」から引用してみよう。

(1) 「近代」化する以前の日本の広告史は無視されていた

西欧的なものを移入してからの広告史はあっても、いわゆる「近代」化する以前の日本の広告史はほとんど明らかにされていない。今のうちに、その大筋なり研究の手掛かりになるものをまとめておく必要があること。またそのための資料もこのままの状態では散逸してしまい、先へいくと一層判然としなくなる心配があるということである。

(2) 広告の創作活動にも、江戸・明治は無視できないこと

これはあまりにも当然のことだが、新しいものを創造していくためには、私たちの育ってきた日本の風土や伝統は無視できないということ。

(3) 引札は庶民の暮らしに深く溶け込んでいた

江戸時代の広告といえば、その代表的なものとして、看板と引札が挙げられるのが通例であるが、看板についてはいくらかでも調べたものがある。ところが引札については、断片的に述べてある記事がたまに見付かるくらいで、まとまった著述は一冊もない。そのため引札といえば現在のチラシ広告である、といった程度のことしか知られていない。ところが一口に引札といっても、正月用引札、宛名付き引札、さらに近接するものまで加えたら繪曆、繪びら、錦繪広告まで加えることができ、極めて多様である。そしてもっと大切なことは、当時は新聞・電波はもちろんのこと、情報や娯楽に乏しかった時代だけに、引札の果たした役割は、ただ買物案内だけではなかったということである。

(4) 引札は世相風俗を知るための資料でもある

今日でもチラシ広告は、消費者にとって最も身近な広告であるといわれ、見直されてきているが、当時は今よりもっと庶民の暮らしに結び付き、そのなかに溶け込んでいたのである。最近では常民思想なども普及されつつあるが、かつての引札は商業資料としてだけでなく、当時の庶民の暮らしを知るための世相風俗資料としても価値があり、一度見直してみる必要がある。一私にはそう思えてならないのだ。しかも、引札のなかには、戯作者や浮世繪師たちがその制作に加わっていたものがあって、これらのなかには江戸文学の一環を成すもの、あるいは版画芸

術・民芸品として今日の鑑賞に耐え得るものもある、ということをおきたいのである。（中略）ここ十数年間は引札の収集に没頭してきたのである。

以上をまとめると、近代以前の広告史研究実績が少ないこと、広告の創作活動には、江戸・明治期の広告を無視できないこと、引札は当時の世相風俗研究に欠くことができないことなどを理由に収集と研究を重ねたことが判る。

【コレクションの位置付け】

最後に本コレクションの学術的位置付けと特色を指摘したい。

①日本広告史を網羅的に検証できる一大コレクション（総数 16,500 点）であること。

②広告史のみならず、世相風俗史、デザイン史を裏付ける資料的価値があり、氏が指摘している「これまで見のがされてきた引札・ビラを証言者として…世相風俗史をまとめてみたかった」「引札は過ぎしの暮らしの形見かな」に通じるものである。

③美術的に優れた広告だけでなく、粗末な紙で摺もよくない、見たらすぐ捨てられそうな散らし広告をも含むことと、いかなるビラがいかなる場所で活用されたか、即ちビラがモチーフとなっている錦絵などもコレクションの対象にしている。

本年 4 月からの公開分では全ての画像データも閲覧可能なので、多くの方々の利用とともに、思わぬ発見の両面で期待している。

基幹研究「民間アーカイブズの保存活用システム構築に関する基礎研究」

大友 一雄（国文学研究資料館教授）

「民間アーカイブズ」は、国・地方自治体のような公的団体が作成・管理する公文書ではなく、家・個人もしくは多様な民間団体が作成・授受・蓄積してきた記録群を指すものとして用いた。公的な団体は、組織の特徴が長期継続的であり、そこで発生する記録を組織的・系統的に保存管理することも可能であるが、家・個人・民間団体は柔軟で永続性に欠けることもあり、民間アーカイブズの保存管理は恣意的・断片的になることが多い。しかし一方で、学術的に重要な記録群や書籍類などの多くが民間に発生・伝来してきたことも事実であり、この点はわが国の大きな特徴となっている。

2011年4月の国の公文書管理法施行は、長年にわたって公文書の保存活用を目標にしてきた日本のアーカイブズ運動の大きな画期のひとつとなった。しかし、運動のもう一つの柱であった民間アーカイブズについては、様々な研究者が重大な関心を寄せているにもかかわらず、保全・収集に対する十分な対策がとられず、地域の過疎化・高齢化・自然災害・財政貧窮などにより散逸・消滅は一層厳しいものとなりつつある。民間アーカイブズの価値を市民レベルで再検証するとともに、それらを守り後世に伝えるための科学的な研究は、極めて緊急性を有する課題である。

本研究では、当館の収蔵アーカイブズにおいても多数を占める民間アーカイブズの生成・伝来などの固有の特質を追究すると同時に、それらを踏まえて受入・管理・保存・公開に関する諸課題を、アーカイブズ学の観点から理論的に検証する。また、具体的な実践モデルとなる民間アーカイブズの調査

を通じて、保存活用システム構築へ向けた基礎的な分析成果の蓄積を図る。その上で、わが国における学術情報基盤の整備に資すると同時に、民間アーカイブズを社会のなかの「公共物」として後世へ伝えていくための理論と方法について検討していきたい。

なお、この研究では、「民間アーカイブズ論構築班」「民間アーカイブズ調査研究班」の2つの班を設けて調査研究を行い、理論的研究と実践的研究との相互連携を通じて、より具体的・効果的な民間アーカイブズ保存活用への道筋を追究する予定である。

「アーカイブズ論構築班」では、調査論、伝来論、収集整理論、編成記述論、情報公開システム論、公共活用論、物理的保存管理論の7つの研究視角を設定し、研究会での報告・討論を通じて、民間アーカイブズ固有の特質と課題を析出・検討し、システム構築に向けた基本的な考え方に関する議論を深めたい。

「民間アーカイブズ調査研究班」は、研究視角に適応した複数の文書（古文

書から口述記録まで）を対象として、実践モデルとなるアーカイブズ群を設定し、調査を通じてアーカイブズ資源の生成・集積と構造、管理方法上の実情と課題などを析出・検討し、研究会での調査報告により「アーカイブズ論構築班」の活動へとフィードバックさせる。調査対象としては、館蔵文書群を手がかりに、当館と現地とに分散して管理することになった文書群（信濃国松代真田家文書・八田家文書など）や、多摩地域を中心とした個人・団体文書群などを共通題材としたい。

「民間アーカイブズ論構築班」を中心とした研究成果は、シンポジウムの開催や紀要への論文掲載などを通じて公開する予定であり、これらを通じて本格的な研究書の刊行へ向けての準備を進めたい。一方、「民間アーカイブズ調査研究班」の調査研究成果は、2015年度に研究書の刊行を予定するとともに、調査によって得られたデータ等を、当館のデータベースや『史料目録』などへ反映させていきたい。



信州松代の八田邸（文化庁登録有形文化財）

特定研究「日本古典籍の書型に関する研究」

陳 捷 (国文学研究資料館教授)

日本の古典籍の特質を考える際には、内容のみならず、その形態も重要な要素である。古代日本にもたらされた書籍の形態が国内の諸条件を反映しさまざまに変化するのと同時に、その後の中国・韓国との文化接触などによっても変化を重ねてきた。

書物の形態はその内容（著述内容やジャンル）と密接にかかわるものであるが、従来の書誌学的研究は主として書籍の形態のみを取り出して記述を重ねてきた。一方、文学研究はテキストのみを対象とし、その書籍としての形態があわせて考察されることは多くはなかった。本研究は、これまであまり重視されることのなかった書物の形態（当該研究では「書型」に特化する）とその内容（著述内容やジャンル）の密接な関係を考察対象とし、新たな研究分野をひらくための基礎的な研究を目的とするものである。

多岐にわたる書誌学の問題の内、書物のかたち、とくに「書型」をとりあげて研究を深めていきたい。古典籍の書型は多くの場合縦長の長方形である。しかし、日本の古典籍には中国や韓国では比較的少ない正方形の「枡形本」や横長の「横本」など、特殊な書型の書物も多く見られる。また、例えば「中本型読本」など、書型とジャンルが密接に結びついた呼称や概念も存在することも日本独自のことであり得ると思われる。本研究においては、日本の古典籍の書型が書物の内容とどう関連するのか、また、横本や枡形本が本当に日本に独自の書型なのかということなどにつき、多角的に検討する予定である。時代やジャンルを横断するより広い検討の場を設けることで、これまで時代やジャンルの枠の中で行われてきた個別の考察を改めて検証し、その正否の再検討や歴史的展開を踏まえた理解を目指す。萌芽的性格を持つ本研究の検討により、日本古典籍の書型の形成と変遷の歴史について新たな視点から捉え直すことが可能となるのみではなく、書物交流史の角度から見ても、ひろく中国、韓国、ベトナムといったアジアの書籍文化の研究に新しい視点を提示し、アジアの古典籍の比較研究へとつながるような今後の多様な発展が期待できる。

本研究のメンバーと分担は以下の通りである。

〈館内〉

陳捷 (国文学研究資料館研究部教授・研究代表者)
漢籍書誌学

入口敦志 (国文学研究資料館研究部助教)
日中韓の出版文化の比較検討

海野圭介 (国文学研究資料館研究部准教授)
近世以前の写本の形態

黄 昱 (総合研究大学院大学文化科学研究科日本文学研究
専攻博士後期課程)
RA

林真人 (総合研究大学院大学文化科学研究科日本文学研究
専攻博士後期課程)
RA

〈館外〉

柏崎順子 (一橋大学法学研究科教授)
近世の出版

佐々木孝浩 (慶應義塾大学附属研究所斯道文庫教授)
近世以前の書誌学全般

中村健太郎 (帝京短期大学人間文化学科助教)
近世以前の写本の形態

平成 25 年 5 月 31 日 (金) にすでに第 1 回の研究会を開き、「枡形本の諸問題」などのテーマについて研究発表と討論を行った。今後の計画としては、基幹メンバーによる研究会の開催、資料調査およびメンバー以外の有識者との情報交換・研究交流などを行うほか、来年 1 月に本館において成果報告を兼ねてのワークショップも予定している。



枡形本の韓本『論語』(個人蔵) 表紙



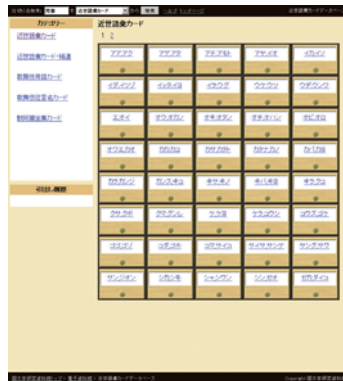
枡形本の韓本『論語』(個人蔵) 版面

「近世語彙カードデータベース」について

国文学研究資料館のデータベースに、新しく「近世語彙カードデータベース」が加わりました。これは近世語彙の用例を出典とともに記したカードのデータベースで、辞書に載っていない語句の意味を考えるとときや、辞書よりもっと深く意味を考えたいとき、たいへん有用なものです。



「近世語彙カードデータベース」
トップページ



「引出し」表示例



「荒事」用例カード表示例

例えば、歌舞伎の演技に「荒事」というものがありますが、「荒事」のカードは29枚あって、29の用例を知ることができます。一例を示すと「荒事 日本思想大系 役者論語魁 P.484 荒事は袴にても素足が強く見へるなり」などと記されていて、他のカードの用例も調べることで、この演技の実像に迫っていくことが出来るのです。

このカードは故松崎仁先生(立教大学名誉教授)が作成されたものです。松崎先生が生涯にわたって作成されたカードは「近世語彙カード」約14万枚をはじめとして、全てで20万枚に及んでいます。先生の遺された膨大なカードは、未踏の成果であり、語彙情報の宝庫です。松崎先生の御専門は近世演劇でした。そのため演劇関係の語彙が比較的多いのですが、収録語彙は近世文学・近世文化全般に及んでおり、文学・歴史・国語の研究者すべての役に立つものになっています。

カードには、該当語句を含む文章および出典の書名・巻・頁などが記載されていますが、出典の書名・巻・頁のみを記した文章は省略されているカードも多くあります。また、出典の書名は略称になっている場合もあります。例えば「定西」は「定本西鶴全集」、「近全」は「近松全集」です。また、松崎先生の手書き文字には判読しにくい部分も稀に存在しています。

出典への探索や、略称の復元、文字の判読は利用者にはゆだねられますが、収録された文献のすべてに目を通す手間を思えば、このカードの利用価値は計り知れないものがあります。当館HPの「電子資料館」をクリックし「近世語彙カードデータベース」にアクセスし、御利用ください。

収録された松崎先生のカードは、すべてボール紙の靴箱に入っていました。奥様が靴を買って帰られると、いつも先生は「ああ、靴箱が来た」と喜ばれたと言います。先生のたゆまぬ御努力に思いを馳せつつ、「近世語彙カードデータベース」を存分に御利用いただきたいと思えます。

「近世語彙カードデータベース」の内容は次のように分類されています。

- ①近世語彙カード(近世の諸文献より採取した一般語彙)約135,000枚
- ②近世語彙カード・補遺(近世の辞書類などより採取した一般語彙)約7,000枚
- ③歌舞伎用語カード(「役者評判記」「台帳」「歌舞伎雑書」等より採取した歌舞伎の用語等)約7,000枚
- ④歌舞伎狂言名カード(「役者評判記」「絵入狂言本」等より採取した歌舞伎の題名)約3,000枚
- ⑤『黙阿彌全集』カード(『黙阿彌全集』より採取した歌舞伎用語等)約5,000枚

作成されたカードのデータベース化と公開を、生前に快諾された松崎仁先生に衷心より御礼を申し上げます。

このデータベースは、九州情報大学教授・九州大学付属図書館特別研究員の南俊朗氏が主導し九州大学付属図書館が開発した「図書目録カードイメージ検索システム」に搭載しました。渡辺憲司立教大学名誉教授、木越治上智大学教授、瀧口富夫氏(八木書店)からは様々な御協力をいただきました。また、カードの採取は主として松崎仁先生によるものですが、立教大学松崎研究室に所属された方々の助力があったことを付言しておきます。

(武井協三：当館名誉教授)

企画展示 渋沢敬三からのメッセージ —渋沢栄一「青淵翁記念室」の復元×渋沢敬三の夢みた世界—

当館には、明治の実業家として著名な渋沢栄一の嫡孫で、日本の民俗学・民族学を発展させた人物としても有名な渋沢敬三によるコレクション資料「日本実業史博物館準備室旧蔵資料」が所蔵されています。

1931（昭和6）年11月11日に渋沢栄一が死去した後、現在の北区飛鳥山公園内にある敷地と建物が渋沢記念財団竜門社に寄贈されました。竜門社は、この旧渋沢栄一郎の利用に関する委員会を設置し、1937（昭和12）年7月15日、「渋沢青淵翁記念実業博物館」（青淵は栄一の雅号）の建設を決議します。この決議は、委員の一人であった渋沢敬三による近世経済史博物館の建設という「一つの提案」をベースにしたもので、これにより資料の収集・保存・管理および博物館建設計画が敬三の手に委ねられました。1939（昭和14）年5月13日の渋沢栄一生誕百年記念祭には博物館建設地鎮祭が挙行されましたが、折りからの戦時経済統制の強まりによって竣工には至りませんでした。その後も「日本実業史博物館」の名称で資料の収集および展示・収蔵のための施設設置場所の模索が続けられましたが、実現には至らずに終わりました。まさに「幻の博物館」となったのです。

日本実業史博物館構想が断念された後、その準備室が収集したさまざまな資料は、1951（昭和26）年に文部省史料館（旧・国文学研究資料館史料館〔通称・国立史料館〕の前身）に一括寄託されました。そして、渋沢敬三が没する前年の1962（昭和37）年、正式に寄贈となり現在に至っています。

この企画展示では、日本実業史博物館の一角を占める予定であった「青淵翁記念室」に関する資料データベース構築の成果をもとに、渋沢史料館との研究連携を行い、「青淵翁記念室」の復元を試みます。また、渋沢敬三が抱いていた“回遊展示”構想を具体的に表現するため、国営昭和記念公園内のこもれびの里に移築された旧石井家住宅（立川市指定文化財）の展示や、立川市役所内の多目的プラザに設けられる企画展「立川の古民家～小林家住宅と石井家住宅～」(企画：立川市歴史民俗資料館)などと連携した、現代版“回遊展示”も企画しています。多数の皆さまのご来場をお待ちしております。(青木 睦)

開催期間：平成25年9月13日（金）～10月14日（月・祝）

開催時間：午前10時～午後4時30分 ※入場は午後4時まで

会場：国文学研究資料館1階 展示室 **入場料：**無料

休室日：日曜日・月曜日

※10月13日（日）および14日（月・祝）は開室

ギャラリートーク：9月25日（水）、10月2日（水）、10月9日（水）、

10月12日（土）、10月13日（日）、10月14日（月）午後1時～2時

*この秋には歴史系の企画展示が続きます。10月18日（金）～10月22日（火）には「周流する記録—長野で発見された台湾の古文書」を開催します。長野県中野市の山田家で発見された渋紙（紙に柿渋を塗って乾かし、敷紙や保護カバーなどに用いるもの）には、清朝末期の台湾地方役所の档案（公文書）が使われていました。当時の地方档案はほとんど伝えられておらず、極めて稀少なものです。1週間という短い展示期間になりますが、こちらの展示もご期待下さい。



連続講座「くずし字で読む『源氏物語』」

当館では日本古典文学の普及を図るため、一般の方を対象として、今年も連続講座「くずし字で読む源氏物語」を開催します。応募方法等は以下のとおりです。ご参加をお待ちしております。

開催日程（全5回）：第1回 平成25年10月2日（水）

第2回 平成25年10月9日（水）

第3回 平成25年10月16日（水）

第4回 平成25年10月23日（水）

第5回 平成25年11月6日（水）

各回時間：14:00～15:30 ※但し、都合により日程・時間を変更する場合があります。

会場：国文学研究資料館2階大会議室

講師：今西祐一郎（国文学研究資料館長）

受講料：無料

申込方法：定員90名（応募多数の場合は抽選）

ハガキ又はFAXに郵便番号、住所、連絡先の電話番号、氏名（フリガナ）をご記入のうえ、下記の申込み先までお送りください。

締め切り：平成25年8月23日（金）

※なお、お申し込みは全5回の講座に毎回出席できる方に限ります。

※講座は、平成24年度と同じ内容を予定しています。

【申込み・お問い合わせ先】〒190-0014 東京都立川市緑町10-3

国文学研究資料館「連続講座」係まで

FAX 番号 042-526-8604

TEL 050-5533-2910



『源氏物語』江戸前期刊、絵入り（当館蔵）

平成 25 年度 国文学研究資料館「古典の日」講演会

11月1日「古典の日」講演会2年目の本年は、会場を千代田区神田のイベントホールに移し、外部から『リンボウ先生』の綽名で有名な作家・国文学者・書誌学者の林望先生をお招きして開催します。当館からは近世国文学・演劇学の教授 山下 則子氏が講演します。

昨年の応募者数の盛況にお応えして、450人分のお席をご用意いたしました。ふるってご参加いただきますよう、お待ち申し上げております。

日時：平成25年11月1日（金）13時30分～16時00分（開場：12時30分）
場所：ベルサール神田（東京都千代田区神田美土代町7 住友不動産神田ビル2F）
 「小川町駅」B6出口徒歩2分（都営新宿線）
 「神田駅」北口徒歩7分（JR線）

講演内容 ・「風流・やつし」と「見立て」－浮世絵を中心に－
及び講師： 山下 則子（近世国文学・演劇学 当館教授）
 ・「源氏物語を読むこと、訳すこと」
 林 望（作家、国文学者、書誌学者）

聴講料：無料 ※事前申込が必要です

申込方法：ハガキまたはFAXに郵便番号、住所、連絡先の電話番号、氏名（フリガナ）をご記入のうえ、下記申込み先までお送りください。

締め切り：平成25年9月30日（月）当日消印有効
 ※応募多数の場合は先着順。受講していただく方には、受講票をお送りいたします。

【申込み・お問い合わせ先】

〒190-0014
 東京都立川市緑町10-3
 国文学研究資料館
 「古典の日」講演会担当まで
 FAX 番号 042-526-8604
 TEL 050-5533-2910
 ※当申込みを通じて得た個人情報は、連絡業務のみに使用させていただきます。



講師：林 望

『HUMAN——知の森へのいざない』第4号

■人間文化研究機構監修
 『HUMAN——知の森へのいざない』vol.04
 平凡社 定価：1575円

「巨大古墳と王権」を特集し、巻頭で古代史の吉村武彦氏と考古学の松本武彦氏が「ヤマトの大王と諸国の英雄たち」と題して対談しています。「漢字と国家形成」（犬飼隆）、「二つの平野—出雲と安来」（花谷浩）などの諸論考で国家形成に向かう列島の足音を聞くことができます。他に、国立民族学博物館の音楽展示・音楽の祭りの紹介と連載記事を収めています。



第 37 回国際日本文学研究集会

The 37th International Conference on Japanese Literature

当館では、日本文学研究者による研究発表・討議により、広い視野からの日本文学研究の進展を図り、研究者相互の国際交流を深めるため、国際日本文学研究集会を開催しています。

平成 25 年度は、以下のとおり開催します。

- 日 程** 平成 25 年（2013 年）11 月 30 日（土）～ 12 月 1 日（日）
- 主 催** 大学共同利用機関法人人間文化研究機構 国文学研究資料館
- 会 場** 国文学研究資料館
- 内 容** ①研究発表
 ②ショートセッション発表
 ③ポスターセッション発表
 ④シンポジウム（テーマ「テキスト・ジェンダー・文体－日本文学が翻訳される時－」）
 ※研究発表者及び研究発表表題については、9 月下旬頃までに決定し、プログラムを当館ホームページにて公開する予定です。

使 用 言 語 日本語

参 加 要 領

- 参加費 : 無料
- 参加資格 : 日本文学に関心のある者（研究者・大学院生・学生・留学生など）
- 申込み方法 : 参加の受付は当日会場で行います。

（問い合わせ先）

国文学研究資料館 国際日本文学研究集会事務局

〒190-0014 東京都立川市緑町 10-3

TEL : 050-5533-2911 FAX : 042-526-8604 E-mail : icjl@nijl.ac.jp



平成 24 年度研究発表



平成 24 年度ポスターセッション

総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況

○入試説明会のお知らせ

平成 25 年 10 月 26 日（土）13 時より、当専攻の入試説明会を行います。入試説明会では、当専攻や入学試験についての説明の他、大学院生が使用する施設、普段入れない書庫の見学などの他、特別講義の聴講ができます。事前申し込みは不要ですので、興味のある方は、是非ご来館下さい。

13 時 00 分～ 専攻、入試についての説明

13 時 30 分～ 総研大施設、図書館書庫等案内

14 時 20 分～ 現役院生との懇談

15 時 00 分～ 特別講義「漱石と英国史」

（野網摩利子国文学研究資料館助教）

16 時 30 分～ 大学院担当教員研究室訪問

〔概要〕 課程：大学院博士後期課程 学位：博士（文学） 募集人数：3 名

〔願書受付期間〕 平成 25 年 11 月 29 日（金）～ 12 月 5 日（木）

〔選考方法〕 修士論文の審査、面接（平成 26 年 1 月 30 日、31 日予定）

○柿衛賞受賞

平成 23 年度に当専攻課程博士の学位を取得した陳可再氏（^{ちんかぜん}四川外国語大学准教授）に、平成 25 年 6 月 2 日柿衛賞が授与されました。これは俳諧関係の新進研究者の中から、優れた研究を行った者に与えられる賞です。受賞対象となった研究は「^{おかにしいちゅう}岡西惟中と^{りんけ}林家の学問」と「芭蕉における『^{ほんちよういちにんいつしゆ}本朝一人一首』の受容—『嵯峨日記』『おくの細道』を中心に」と題した 2 本の論文です。林家の漢詩文を中心とする学問のありようと俳諧との接点について具体的に論じ、外国人として初めて同賞を受賞しました。



授賞式（柿衛文庫提供）

○ホノルル美術館訪書記

紅林健志（国文学研究資料館プロジェクト研究員）

平成24年度「卓越した大学院拠点形成支援補助金」の助成を得て、ホノルル美術館蔵リチャード・レイン氏旧蔵古典籍を、平成25年3月24日～3月29日まで調査してきました。メンバーは総研大院生の林真人氏と紅林、山下則子専攻長、中村康夫副専攻長、小林健二教授です。九州大学名誉教授の中野三敏先生達先行調査団のご了承も得て、期待に満ちて調査にのぞみました。

東洋美術部のスティーブン・サレル氏をはじめとするスタッフの方々のご厚意により、調査は全て書庫の中で行わせていただきました。天井まである鉄製の高い書架に典籍や書画がぎっしり詰め込まれた光景は壮観の一言でした。既に先行調査団により、おおまかに分類されているものの、未整理の和本の山を一点一点調査する作業は、大学院生にはあまり体験できることではなく、調査のみのホノルルでしたが、大変勉強になりました。

私は近時、『増補歌文要語』と『新撰はし書ぶり』（『北陸古典研究』27号、2012・11）の中で、江戸の歌書の出版について言及したので、歌書類を見せていただきました。写本も数点ありましたが、素晴らしいのは同じ版本の異版を数種類集めている点です。これによって諸版の違いが一目でわかる、大変ありがたいコレクションでした。中には国文研貴重書『続女歌仙』の絵はそのままに歌の異なる異版等、古典籍総合目録DBに未載のものもあり、全貌が明らかになれば近世前期絵入り歌書の研究に新たな成果が加えられると思います。興味深かったのは、外題がなく前半が欠けた写本の佚題歌集を、中村教授がPCで検索し、『拾遺愚草』と認定されたことです。コンピューターを使った調査の有用性を実感し、研究のノウハウを学んだという点でも意義深い調査でした。



ホノルル美術館玄関にて

○平成24年度海外学生派遣事業に参加してーライデン滞在5週間ー

江崎公子（総合研究大学院大学文化科学研究科日本文学研究専攻博士後期課程）

総研大 海外学生派遣事業の支援をうけ、平成25年2月26日から3月29日までオランダ・ライデン大学のアジアセンターを中心に資料調査のために滞在しました。最先端機能と歴史の共存、多様性の容認を実感した5週間でした。

ライデン大学アジアセンターで驚いたのは、入り口付近のオープンデスクに広げられたお持ち帰り自由な新聞、雑誌、古本等を目当てにたむろしている学生群です。日本語資料で、学部学生に人気があったのは「AKB48」でした。さらに日本の漫画とアニメは高い評価を受けており、それらが日本文化の入り口であることに改めて気づかされました。

アジアセンターの図書館は、同じフロアでグループワーキングをし、コンピューター検索をし、グリーンルームという静寂が求められる場所があり、そして授業すら行われる、区切りがない融通に富んだ場所でした。

ここでは蔵書コレクションごとに担当司書がいるので、その出講日（週2日）に合わせて閲覧者は準備をします。筆者が近世近代辞書の閲覧を希望すると、「日本語だけ？」と聞かれました。「中国語も他言語も」と風呂敷を広げたところ、意外にも「それならば見るべきものはたくさんあるよ」とのお返事でした。書庫内で「この棚ではこれとこれ」と、書庫内のデスクに山積みされました。新しい情報提供もしてくださり、国際的な知のあり方を得意とする所なのだと思った瞬間でした。



シーボルト博物館にて

日本近世の貴重な辞書・諸本は貴重書室で閲覧しました。例えば1818年版『江戸ルマ』、1810年版『訳鍵』、1810年版『中津辞書』、1822年『バスタード辞書』等の辞書でArtという言葉の訳の変化を年代別に追いかけてきました。

古今の文化の多様性を受け止める知の集積の場であるライデン大学だからこそ体感できた貴重な体験であったといえます。海外派遣というチャンスを与えてくださった総研大関係各位に深く感謝申し上げます。

8月							9月							10月						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3	1	2	3	4	5	6	7			1	2	3	4	5
4	5	6	7	8	9	10	8	9	10	11	12	13	14	6	7	8	9	10	11	12
11	12	13	14	15	16	17	15	16	17	18	19	20	21	13	14	15	16	17	18	19
18	19	20	21	22	23	24	22	23	24	25	26	27	28	20	21	22	23	24	25	26
25	26	27	28	29	30	31	29	30						27	28	29	30	31		

- 開館 9:30～18:00 ●請求受付 9:30～12:00 13:00～17:00 ●複写受付 9:30～16:00
 ただし、土曜開館日は、
 ●開館 9:30～17:00 ●請求受付 9:30～12:00 13:00～16:00 ●複写受付 9:30～15:00

表紙絵資料紹介

〔嵯峨本三十六歌仙〕(国文学研究資料館 新収)

伝本阿弥光悦書・伝土佐光茂画
 〔慶長中〕刊(無刊記) 特大本1冊

嵯峨本(整版)。「光悦三十六歌仙」とも。後補覆表紙の中央に「光悦三十六人首」と記された題簽を持つものの、原表紙はなく原題簽は未詳。もっとも、柱刻や丁付けはなく、もとはバラバラの摺刷であったと思しい。専ら襖や屏風に貼り交ぜにされて鑑賞されたらしく、書冊の形態をとるのは後年の所為、現存諸本すべてが近代に入ってから改装であることもそのことを窺わせる。人丸から中務まで三十六人の和歌および歌仙絵を、肥瘦に富んだ光悦流の筆跡と、古態を留める伝土佐光茂の絵とともに収める。その版面は豪快で力強く、しかもため息が出るほどに美しい。楮紙。素紙摺り。早印。最善本として知られる米国スミソニアン協会フリーア美術館・サッカー美術館蔵の色替り料紙本と同版で、縦は35,3糎(×横25,1糎)と、現存諸本中もっとも大ぶりである。なお多くの歌仙絵中に、色彩を指示した古い書き入れが見られることも注意される(例えば人丸の場合、左肩に「浅黄」、諸所に「白」「朱」など見える)。小虫。



(参考) 鈴木淳「光悦三十六歌仙考」(国文研特別展示図録『江戸の歌仙絵』2009)

(神作研一)



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国文学研究資料館

〒190-0014 東京都立川市緑町10-3

Tel.050-5533-2910 Fax.042-526-8604

発行日 平成25年(2013)8月2日

編集 国文学研究資料館広報出版室

印刷所 三鈴印刷株式会社

©人間文化研究機構国文学研究資料館